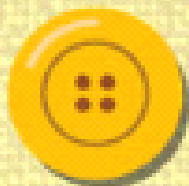
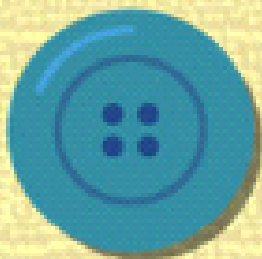


関東甲信越英語教育学会第35回神奈川研究大会
2011年8月6日 専修大学生田キャンパス

英語授業の「楽しさ」を 構成する要因に関する研究

英語授業学研究からのアプローチ

鈴木政浩(西武文理大学)

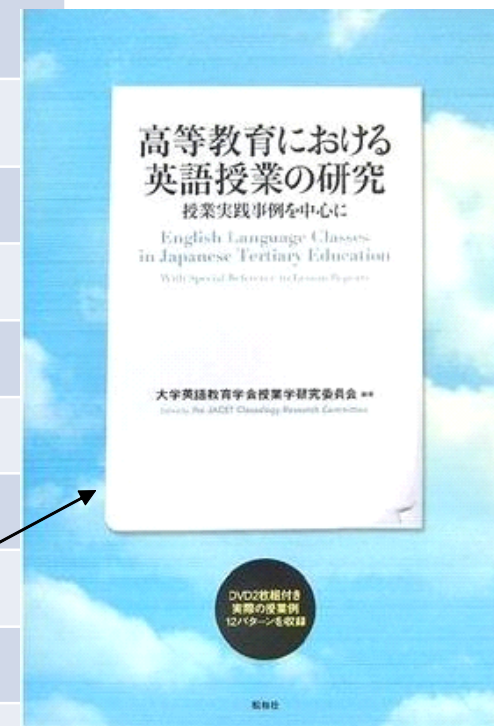


はじめに

・ 英語授業学研究

表1 高等教育における「英語授業学」関連研究の経緯

年	著作等
1983年	若林(1983:186-187)
1984年	若林他共編(1984)
1990年	若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1990)
1991年	松畑(1991)
2001年	『「英語教育の推進について」の検討素案』(2001)
2004年	「田辺メモ:大学英語教育の在り方を考える」(報告) 大学英語教育学会授業学研究委員会発足
2007年	大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)
2010年	大学英語教育学会第二次授業学研究委員会発足 山岸他編著(2010)

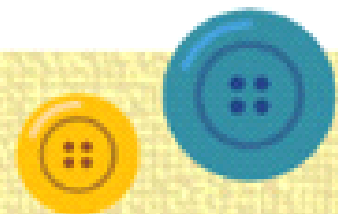


→ 明確な定義がない

鈴木(2011a:54)より

英語授業学研究の定義

- 「よりよい英語授業」の要因を、授業者と学習者の視点から体系化することを目的とした学問



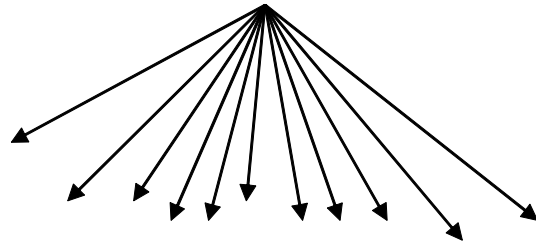
問題の所在と研究の目的

(英語)授業研究のアプローチ
(従来のアプローチ)

授業者の視点からの授業計画

参観・ビデオ視聴

個々の授業のすぐれた点の指摘(授業者)



部分的な知恵の共有
個人的知見 → 「達人」技

英語授業学
(本研究)のアプローチ

体系化された
「よりよい英語授業」の要因

授業実施

省察(授業者+学習者)

授業の成果検証・要因の再検証

誰もができる
「よりよい英語授業」実践

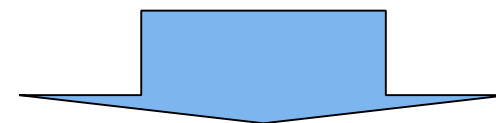
「よりよい英語授業」の要因

表2 「よりよい英語授業」の要因(暫定的分類)

1	授業環境	}
2	指導技術	
3	学習者把握	
4	授業構成	
5	授業内コミュニケーション	
6	人格形成	
7	授業者の専門的知識	
8	内省的取組	
9	コミュニケーション	
10	言語文化観	
11	言語習得	



安心して参加できる	意欲を引き出す
わかる	おもしろい
自発性	雰囲気がいい
知的好奇心	向上心
充実感	発見・感動
好きになる	興味・関心
期待感	ためになる
自発性	満足感
できる	ニーズ
自ら学ぶ	役に立つ

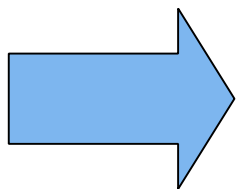


英語授業における「楽しさ」(以下楽しさ)
とはどのようなものを指すのか・・・

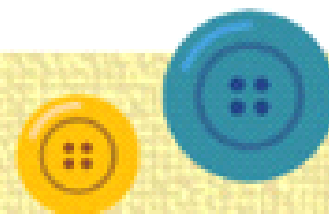
「授業者」が指摘する要因は、大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会編著(2007)をもとに、学習者要因は大学生に対するアンケート調査から要因を抽出した。

問題の所在

- 「よりよい英語授業」の要因の1つとしての「楽しさ」



楽しさの要因とは何か。
どのような要因があるのか

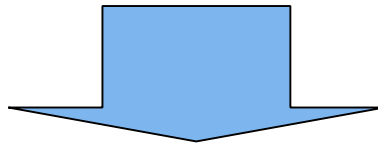


問題の所在

- 「楽しさ」の要素

- 森住(1980)

練習問題ができる、文法や語法の理屈がわかる、雰囲気、ゲームやことば遊び、評価を気にしない、参加の実感、向上を実感、変化に富む→「よい授業」への要因



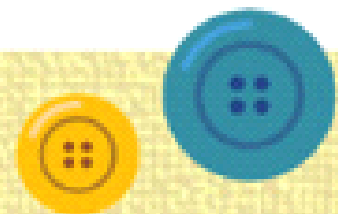
- 鈴木(2011b)の9要素

1. 居場所のある楽しさ 2. わかる楽しさ 3. できる楽しさ 4. 知りたいと思う楽しさ 5. 成長する楽しさ 6. 参加・表現できる楽しさ 7. 個別に取り組む楽しさ 8. 変化に富む楽しさ 9. 成績と関係ない楽しさ

目的

学習者からみた

「楽しさ」の要因を検証すること



方法

- 対象者

- 関東近県の中学生・高校生・大学生1060名

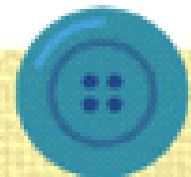
- 実施期間

- 2011年4月から5月

- 方法

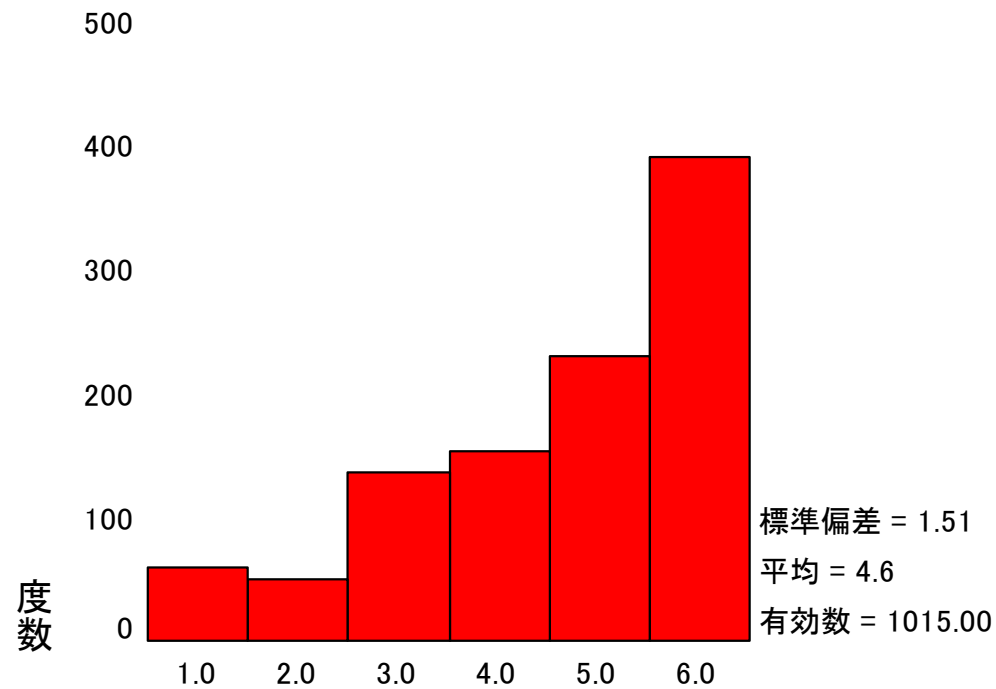
- 鈴木(2011b)の「楽しさ」に関する9要素をもとにした、54項目からなる質問紙調査(6件法)。探索的因子分析

使用した質問紙→別資料参照



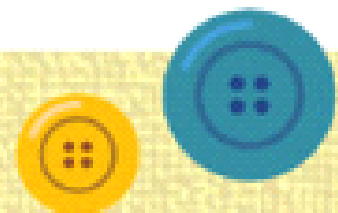
天井効果がみられたデータ

質問10 質問しやすい英語の授業



質問10 質問しやすい英語の授業

図1 質問10における度数分布



考察

・天井効果のみられた質問項目

短期的実現

1. 質問しやすい英語の授業
2. 勉強のやり方を教えてくれる英語の授業
3. 友だちと仲よく勉強できる英語の授業
4. わかるまで説明してくれる英語の授業
5. 英語で会話ができるようになりたいと思える英語の授業
6. 英文法の説明がわかる英語の授業
7. 英文の意味がわかる英語の授業
8. テストの点数が上がる英語の授業
9. ゲームを取り入れて教科書の内容を頭に入れる英語の授業

授業の雰囲気

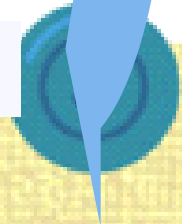
理解・習熟

長期的見通し

10. 英文がすらすら書けるようになる英語の授業
11. 外国人の講師と英語でコミュニケーションできるようになる英語の授業
12. 以前より英語が聞き取れるようになっているのがわかる英語の授業
13. 映画の英語が日本語字幕を見なくても理解できるようになる英語の授業

英語を使えることへのあこがれ

「楽しい英語授業」の前提



結果

「楽しさ」の要因

表 3 各因子名、内容、因子を構成する項目数

	因子名	内 容	項目数
第1因子	参加表現因子	個人、グループの発表や英語で表現する楽しさに関わるもの	6
第2因子	言語文化的知識因子	海外の文化、国々、語源、表現を学ぶ楽しさに関わるもの	4
第3因子	教科書外因子	教科書で学ぶ以外のことを学ぶ楽しさに関わるもの	3
第4因子	熟達因子	できるようになる楽しさに関わるもの	2
第5因子	多様な学び因子	ビンゴやパソコンを使った多様な学びの楽しさに関わるもの	2

パターン行列等→別資料参照

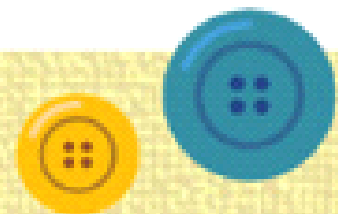
考察

- 天井効果がみられた質問項目

- 「安心して参加できる」「理解・習熟が進む」
 - 短期的に実現可能な授業の「雰囲気」の重要性。楽しさの前提条件
- 英語を自由に操れるようになることへのあこがれ
 - 長期的な見通しとして

- 因子構造

- 森住(1980)の要素とほぼ一致。



研究2

1. 目的

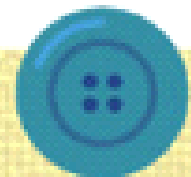
「楽しさ」の5要因について、中学、高校、大学で違いのある因子があるかを検証すること

2. 実施期間

2011年4月から5月

3. 対象者

関東近県の中学生、高校生、大学生743名
(研究1のデータからランダムにサンプルを抽出)



結果と考察 全体的に大きな差はない

下位尺度の平均値に、中高大の差が唯一認められた因子

教科書外因子

表4 中高大の対象者数と平均値および標準偏差

	n	平均値	標準偏差
中学	242	4.02	1.44
高校	250	4.34	1.35
大学	251	4.20	1.29

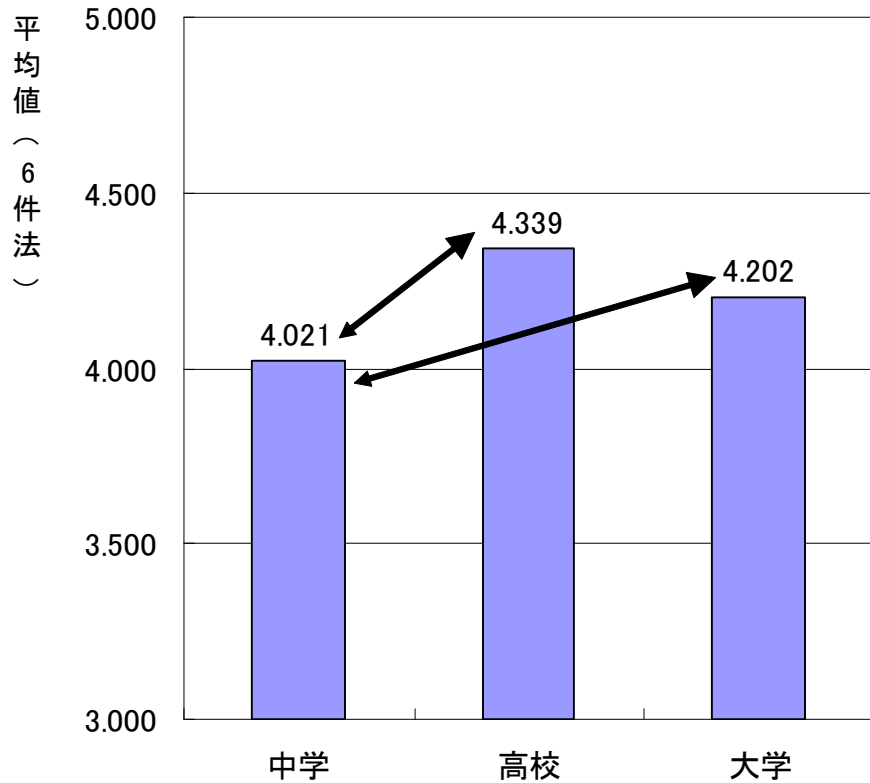


図2 教科書外因子下位尺度平均値の差

表5 平均値の差(中高大)

高校	中学	0.32 *
大学	中学	0.18 *
高校	大学	0.14

* $p < .05$ $F(2,740) = 3.4$

学齡が上がると、若干ではあるが多様な学びの機会を求める可能性

授業への適用

「楽しさ」のねらい設定



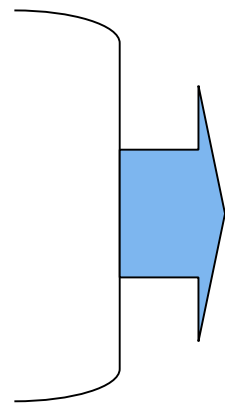
事前アンケート



授業案作成・実施



事後アンケート



参加表現する楽しさ

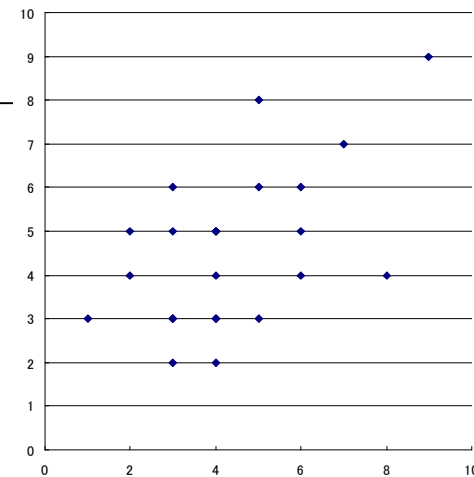
言語文化的知識の楽しさ

教科書外の楽しさ

できるようになる楽しさ

多様な学びの楽しさ

ねらった「楽しさ」の項目の
数値が上昇したかどうか



独自アンケート項目との比較

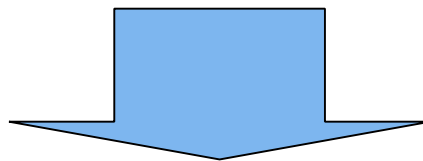
独自アンケート項目の追加



事後アンケート項目との相関

本研究の限界と課題

- 因子分析の結果作成したモデルの妥当性検証
- 因子相互の関係(特に熟達度との関係)
- 中・高・大のデータ比較
- 現状認識から授業改善への見通し
- 授業への適用の実例検証



- 第37回全国英語教育学会山形研究大会における発表
- アンケート報告集の発行

ホームページ等の情報

- <http://msuzuki.sakura.ne.jp/> 鈴木政浩のホームページ
- suzuki1103@gmail.com メールアドレス

今回のアンケート報告書をご希望の方はこちらまでメールをお願いします

- メールングリスト 「より良い英語授業」を考えるML
join-classology.ZBFK@ml.freeml.com

→こちらに空メールを送信していただければ登録手続きが完了します。

「よりよい英語授業」に関する研究や実践に関する交流をお願いできる方はご連絡下さい。

参考文献

- 大学英語教育学会(JACET)授業学研究委員会編著(2007)『高等教育における英語授業の研究－授業実践事例を中心に』松柏社
- 松畑熙一(1991)『英語授業学の展開』東京:大修館書店
- 森住衛(1980)「楽しい授業とは何か」『英語教育』4月号, 56-57 大修館書店
- 鈴木政浩(2011a)「『英語授業学』研究の今日的課題 — 英語「授業研究」と比較して —」『言語教育研究』創刊号 55-65 桜美林大学
- 鈴木政浩(2011b)「大学における『楽しい』授業の創り方」『新英語教育』No.501, 10-12
- 若林俊輔(1983)『これからの英語教師—英語授業学的アプローチによる30章』東京:大修館書店
- 若林俊輔・森永誠・青木庸效 共編(1984)『英語授業学 [指導技術論]』東京:三省堂
- 若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1991)『英語授業学の視点 若林俊輔教授還暦記念論文集』東京:三省堂
- 山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩編(2010)『英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』大学英語教育学会監修 英語教育学大系第11巻東京:大修館書店

その他文献等

(「楽しさ」に言及したもの)

- 神林裕子(2005:30)『『雪まつり』での国際交流活動の有効性ー子どもの『楽しさ』や『英語で相手とコミュニケーションを図ることの慣れ』の観点からー』『北海道教育大学紀要, 教育科学編』, 55(2):27-33.
- 竹村雅史(2007)「函館高専に於ける英語多読指導の試みー最終報告ー」『函館高専紀要』41, 113-117.
- 星野百合子・川島聡史・大兼敦子(2004)「実践的コミュニケーション能力の育成:『学ぶ楽しさ』を実感できる授業への改善を通して」『宇大付属中研究論集』52, 80-93.
- 小磯かをる(2005)「日本人英語学習者の動機付け-JGSS-2003のデータ分析を通して-」『JGSSで見た日本人の意識と行動: 日本版General Social Surveys研究論文集』4(JGSS Research Series No.1), 79-91. 大阪商業大学
- 菅原栄子(2004)「教師中心の英語授業から相互交流的な英語授業へ: 相互交流活動は生徒の学習にどのような効果があるか」『岩手大学英語教育論集』第6号, 35-54.
- 長崎政浩(2010)「外国語教育におけるReading Workshop導入の試み」『高知工科大学紀要』7(1), pp143-151.
- 兼重昇・藤井浩美(2004)「チャットシステムを利用した英語ディスカッションの試み」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』1, 27-35.
- 倉八順子(1996)「英語学習の学習意欲の発達」『名古屋大学教育學部紀要』43, 2-7.
- 小林友宏(2009)「英語を通して何を学ぶかーカナダ国際交流研修旅行を通してー」『大阪教育大学紀要』第57巻第2号 21-29.
- 星野百合子・川島聡史・大兼敦子(2003)「『学ぶ楽しさ』を実感できる授業の実践」『第48回(平成15年度)公開研究発表会外国語科(英語)発表要項』87-98.
- 中井俊樹・中島英博(2005)「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等教育研究』(5) 283-299.
- 原田信之・牛田伸一(訳)(2006)「ヒルベルト・マイヤー教授来日記念講演 すぐれた授業のスタンダード Lecture by Prof. Dr. Hilbert Meyer in remembrance of his visit to Japan. Standards of Good Instruction.」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第55号第1号 183-194.
- 齋藤栄二(2002)「英語教育改革試案 A Tentative Plan for Improving English Language Teaching」『関西大学外国語教育研究』4, 1-35.
- 齋藤栄二(2004)「英語教育改革試案 A Tentative Plan for Improving English Language Teaching」『語研ジャーナル』(3) 93-96.